

## 「第2回全国大学史展 学生たちの戦前・戦中・戦後」の開催

全国大学史資料協議会東日本部会  
第2回全国大学史展実行委員会

全国大学史資料協議会東日本部会(以下「本会」と表記)は、2015年7月3日から8月2日まで、「第2回全国大学史展 学生たちの戦前・戦中・戦後」を開催した。本稿は、その準備から開催までの経緯および成果と課題について簡単にまとめたものである。

### 1 開催決定まで

全国大学史資料協議会は、東日本大学史連絡協議会と西日本大学史担当者が合同して1996年に発足した会であり、大学史に関する情報交換と研究、並びに会員相互の質的向上と交流を目的としている。全国大学史資料協議会は、東日本部会と西日本部会に分かれ、年1回の全国総会・研究会のほか、それぞれの部会で研究会を開催し、会報を発行するなどの諸活動を展開している。両部会のうち本会には、機関会員として66大学・機関、個人会員として36名が加入している(展示開催時の数値)。

本会は、2010年1月15日から2月14日まで、「全国大学史展 日本の大学—その設立と社会—」をすでに開催していた。これは、明治維新直後から戦後までの間における大学およびその前身機関の設立を、会員校が所蔵する資料によって展示したものであった。本会の会員校では、自校史の展示を実施してい

るところが少なくなく、この展示も会員校の日頃の活動の結果実現したと評価できる。

2012年5月に開催された本会の総会で、いわばアウトリーチ活動として特別事業を実施することが決められたが、その具体的内容が第2回全国大学史展となったのも、本会や会員校の展示に関する蓄積があったためと言えよう。

展示テーマについては、①これまで会員校による展示活動の蓄積があるもの、②できるだけ多くの会員校が参加できるもの、を条件に検討した結果「学生たちの戦前・戦中・戦後」に決定した。大学は学生たちの学びの場であるという原則は、いつの時代であっても変わらないものであり、大学横断的な展示のテーマとしてはふさわしいものであった。

### 2 諸準備

準備にあたっては、5名からなる実行委員会を2013年5月に発足させた。実行委員会は、展示の開会まで計10回開催され、以下のようなさまざまな活動を行った。

#### ①会員校が所蔵する資料の調査

実行委員会は、本会の全会員校を対象にアンケートを実施した。アンケートは、「学生たちの戦前・戦中・戦後」というテーマに即

して、会員校がどのような資料を展示に提供することが可能か調査することを目的としていた。具体的には、戦前期・戦中期・戦後期の3期に分け、例えば戦前期であれば(1)学生の諸活動に関する資料、(2)授業関係資料、(3)日常生活関係資料、(4)震災・恐慌と学生関係資料、(5)教練関係資料、(6)留学生関係資料、(7)その他、のそれぞれの項目にあてはまる資料について、名称、意義、サイズ等を回答してもらった。その回答をもとに実行委員会では展示構成案を検討していった。

## ②展示構成案の検討

展示構成案を検討する上で、議論を繰り返したのは展示対象時期をどうするかであった。対象時期を広げすぎると展示が散漫になってしまうと考え、始期を第一次大戦後の高等教育機関の拡張、終期を高度経済成長期の1960年代半ばとした。それは、現在の日本の大学の原型が形づくられたのが、ほぼこの間ではなかったかという歴史認識に基づいている。そして、この50年弱の期間を、おおむね日中戦争の開始と戦後改革で区切って戦前期・戦中期・戦後期と3期に区分した。

また、こうした通史展示以外に、学生生活の諸側面を示すものとして、「写真でみる学生生活」と題して学園祭と卒業アルバムに見る都内名所・学校近隣の写真を展示することにした。

## ③原稿執筆、校正

各展示品のキャプションをはじめとした解説の原稿は、実行委員が分担して執筆した。執筆した原稿は、それぞれの資料を所蔵している会員校の確認を受け、さらに全体の表記の統一を行った。なお、校正については時間を節約するためセキュアなクラウドストレージに校正データを置き、実行委員と業者との間で随時校正のやり取りを図った。

## ④業者との交渉

パネル製作、会場設営等にあたる業者として、株式会社内田洋行を選定して依頼した。同社は、いくつかの大学史展示を請け負った

実績があり、また前回の全国大学史展でも依頼したということもあり、作業をスムーズに進められた。

## ⑤展示会場の確保

会場は明治大学博物館特別展示室を借用した。本会の事務局校である明治大学所有の施設であるため作業上の利便性が高く、また無料であることも選んだ理由である。そして何より御茶ノ水駅から徒歩5分という立地のよさが大きかったと言える。

## ⑥図録の製作

展示資料の決定とともに、各会員校から展示資料の写真の提供を受け、それをもとに展示図録を製作した。図録はA4判、48頁で4000部印刷し、開催初日から展示会場において無償で配付した。

実行委員会は、こうした準備を行いつつ、必要に応じて本会の研究会の場で進捗状況を報告し、会員全体から直接意見を募るよう努めた。

## 3 実施

展示の主な構成は以下のとおりであった。

### I 戦前の学生たち

1 学校数・学生生徒数の増加／2 学生の諸活動／3 授業関係／4 日常生活／5 震災と学生／6 教練の開始

### II 戦中の学生たち

1 日中戦争のはじまり／2 アジア・太平洋戦争への拡大／3 戦局の悪化／4 戦争の終結

### III 戦後の学生たち

1 学生たちの戦後復興／2 正課・課外活動／3 戦後学生生活の諸相

### IV 写真でみる学生生活

学園祭編／都内名所・学校近隣編

展示した資料は、66大学・機関および1個人から提供された約260点に上った。また、このほかに行事や学生生活を映した動画20点を会員校から提供を受け、観覧者が見られ

るように設定した。

観覧者は合計 2635 名、1 日平均としては 85 名であった。メディアについては、全国紙三紙のほか、多くの地方紙による取材があり、NHK も東京ローカルのニュースで報道した。会場にアンケート用紙を置き、受付から積極的な記入を呼びかけた結果、1813 通記入していただくことができた。それによると、観覧者の約三分の二が 40 歳以上、大学生に相当する 18～22 歳は記入者の約 13% にあたる 231 名であった。感想としては、「貴重な資料を多く見られた」等の好意的なものが比較的多かったが、資料を提供する大学の偏りなどを指摘する意見も見られた。総じて、戦時期の展示についての感想が大多数を占めていた。

#### 4 成果と課題

本展示の成果としては、多くの大学・機関が資料を提供することで、一大学の展示だけでは表せなかった深みを示せたことが挙げられる。例えば、ある会員校が教育勅語の収められていた桐箱を所蔵しており（勅語そのものは所蔵していない）、当初本展示でも桐箱のみを出す予定であったが、研究会の場で他の会員校が勅語そのものを所蔵していることが分かり、桐箱とセットで展示することができた。このように、各大学・機関が資料の相互補完を行うことで、より豊かな歴史像を社会に発信できるようになると考えられる。また、個々の会員校にとっても、こうした展示の開催によって大学史や資料についての理解が深まり、それが各大学の展示にも反映されることが期待できよう。

一方で浮き彫りになった課題もある。

第一は、テーマ設定の難しさである。展示

を開催した 2015 年は、「戦後 70 年」ということで、戦争に対する社会的な関心が高まっていた。アンケートにみる観覧者の感想や、メディアによる取材の多さもそれを物語っている。その反面、戦前期や戦後期は前述したように展示の趣旨からして極めて重要であるにも拘らず、注目度は決して高くならなかった。そもそも、展示テーマの設定にあたって、多数の会員校が所属している本会では、いわゆる戦争協力など現在でも評価の難しい問題を直接扱うのはかなり困難と言わざるを得ない。これは大学史という日本近現代の歴史を対象とする以上、避けられない問題であり、それぞれの会員校が地道な資料の蓄積を行っていくことによって、少しずつ共通理解を深めていくしかないと思われる。

第二は、アンケートにもあったが資料を提供する大学の偏りである。本会の会員は東日本の大学・機関がほとんどである上に、発足当初から私立大学が会の中核を担ってきていた。そうしたこともあって、展示資料を提供する大学に偏りが生じ、「全国大学史展」という看板からすると物足りない印象を観覧者に与えたかもしれない。加えて、限りある予算の中で、運搬費用のかかる遠方の大学からは資料を出せないという事情もあり、余計に偏りが生じてしまった。これは本会の構造的な問題と言えるが、本会としては会員外の大学とも交流し信頼関係を醸成していくことが求められるであろう。

いずれにしろ、この展示が本会にとって貴重な経験であったことは間違いない。この経験を、本会および各会員校が自らの活動にどのように生かしていくかがこれから問われることになるであろう。